

大津

1998  
No.35

歴博だより



大津市制一〇〇周年特別展

## 家族の一世紀

第一部 我が家にテレビがやってきた  
 第二部 資料で見る一〇〇年



大津市建設祝賀祭ポスター 栗東歴史民俗博物館蔵

9月30日(水)～11月15日(日)

大津市民の生活のスタイルは、市制が施行された明治三十一年（一八九八）から現在までの間に、さまざまな変化をみせてきました。この間には、第二次世界大戦の勃発や終戦など、大きな画期となる出来事がいくつかありましたが、今回は、そのなかでも昭和三〇年代に注目してみました。この時期は、家庭生活のあらゆる面に電化製品が入り込み、人々が一躍「文化的」な生活を営むようになった時代です。テレビ・冷蔵庫・洗濯機は、家電製品の「三種の神器」と呼ばれ、さらにカラーテレビ、クーラー、マイカー（自家用車）の普及は、それらの頭文字をとって「3C時代」と名付けられました。しかし家電製品の登場により、生活が「便利」になった反面、それまで日常生活の脇役として重宝されていた道具が、今や絶滅寸前となっているのが現状です。井戸と釣瓶、火鉢や卓袱台や炭アイロン等々、代々家庭で使用されてきた「便利な道具」が、新しい「便利な道具」ととって代わったのです。

大津市制一〇〇周年記念展の最後を飾る展覧会は、前々号で紹介した「大津市民の一〇〇年」展を改題し、「家族の一世紀」展としました。展示は二部構成とし、第一部で、先述した昭和三〇年代の家庭電化前後の生活様式の大きな変化を明らかにしようとしてみました。また第二部では、市制施行以来の大津市の歩みを、時々の特徴を示す資料と珍しい写真によって紹介しています。生活様式の変化という身近な移り変わりの中から、大津市と市民の生活の変化を振り返っていただければ幸いです。

## 特別展の内容

### ☆主な展示資料

#### 絞り機付き噴流式洗濯機

三洋電機所蔵

三洋電機では昭和二十八年八月、国産第一号の噴流式洗濯機を発売。これは従来の攪拌式洗濯機が洗濯物を痛めるという難点があり、また高額であったことから開発されたもの。今回展示するものは、翌二十九年に発売された改良型で、絞り機が付いています。当時の発売価格は、二九、五〇〇円。その頃の国家公務員の初任給は、八、七〇〇円でしたから、それでもまだ高額だったようです。現在では洗濯物の脱水も自動式になっていますが、現在の中年世代以上の方は、子どもの頃、絞り機を使うのが面白くて、よく手伝った経験がおありでしょう（写真①）。

本展ではこの他、洗濯機登場以前、湖岸で洗濯をしていた頃の貴重な写真（写真②）、戦前の昭和五年に製



写真① 三洋噴流式洗濯機

造された東芝の冷蔵庫（当時は冷蔵庫と呼んだ、重量一五〇kg）や攪拌式洗濯機（昭和二十一年製造）なども展示します。家電製品といえば昭和三〇年代以降と思いますが、戦前から家庭電化の動きは活発でした。それらの進歩は、戦争によって中断されてしまったのです。



写真② 唐橋のたもと 田中三郎氏撮影

#### 展示する昔の生活用品

- ・夏の暮らし―氷冷蔵庫、アースの殺虫剤噴霧器（写真③）、氷かき、四枚羽根の扇風機他
  - ・冬の暮らし―陶製こたつ、品川式あなか、湯たんぽ、火起こし他
  - ・食生活―ふご、おひつ、木製米びつ、卓袱台、かつおぶし削り、保温式電気釜他
- \*これらの生活用品は、かつて生活の脇役として重宝がられていたのですが、家電製品の普及の中で、今や絶滅寸前となっているものばかりです。

#### 京町歳の市商店双六

柴山久治家蔵  
縦三六・八cm 横五三・四cm

家電製品が普及した頃、家族の買い物は大型店



写真③ アース殺虫剤噴霧器

舗ではなく商店街でした。本展ではそういった、かつての商店街の活況を示す資料を、時代を遡って扱っています。写真④は、京町商店街の大売出しに際して配られた宣伝の双六。戦前の発行で、店の名前は右から書かれ、電話番号も三ケタの店が多くあります。その他商店街関係では、明治から大正にかけての双六や商店の位置を丁寧に記した地図、色鮮やかな宣伝ビラ（引札）、昭和初年からの商店街の懐かしい写真なども合わせて展示しています。



写真④ 京町歳の市商店街双六



写真⑤ 三日月楼（明治時代）

明治末年の石山寺参道の風景  
 明治三七、三八年頃の撮影と注記された石山寺の参道の風景写真。写真左手の旅館は三日月楼。右手の緑台に座っている泊まり客の背後に、大津行きの汽船乗り場を示す標柱が建っているのが見えます。旅館の家並みや泊まり客の風貌など、いかにも古びた、のどかな風景といえるでしょう。本展では、市民の方々から提供を受けた貴重な古写真なども豊富に展示します（写真⑤）。

大津市建設祝賀祭ポスター 栗東歴史民俗博物館蔵  
 縦七六・三cm 横五二・五cm

昭和八年四月一日、大津市と膳所・石山両町が「解消合併」という特異な形で合併を成立させました。新市の誕生は「大大津市の誕生」と新聞で報じられ、四月一日からの三日間、市民の楽しい仮装行列や、花電車の運行など、さまざまな祝賀行事が繰り広げられたのです。写真は、その行事を案内した貴重なポスターで、大津市の風景を象徴する「長等の桜」を大きく配置し、大津市の町並みや対岸の近江富士（三上山）を描いています（表紙写真）。

## 本展のみどころ

家庭電化以前のサラリーマン住宅の居間と、同時期の町家の台所を実物大復元します

カメラを持ってご来場ください。このコーナーのみ写真撮影可能です。昔の懐かしい生活用具に囲まれて記念撮影としゃべってみられては。

昭和初年の貴重な映像や、三〇年代以降のニュース映像を展示室内で放映

昭和初年の上水道通水記念祝賀行事、瀬田工業高校が高校野球ベスト4で凱旋、琵琶湖大橋の工事中のニュース、びわこ大博覧会ほか。

テレビ、洗濯機、冷蔵庫の国産第一号機や戦前の電化製品をとり揃えて展示

テレビ（シャープ）、冷蔵庫（東芝）、噴流式洗濯機（三洋電機）ほか

## 学芸員のノートから⑫

琵琶湖蒸気船黎明期を支えた鍛冶職

—伊東源兵衛をめぐって—

### ○「一番丸」の就航

明治二年（一八六九）三月、琵琶湖初の蒸気船「一番丸」が湖面にその姿を表す。黒煙をあげ湖上を疾走する一番丸は、湖国に近代の幕開けを告げる象徴的な出来事であった。この一番丸就航に尽力した人物として、加賀大聖寺藩士石川璋と大津百艘船仲間の一庭啓二の名が広く知られている。石川三十歳、一庭二十五歳の若い情熱がこの大事業を成し遂げたといえるだろうし、激動の時代に相応しい快挙だったと評価できるだろう。

しかし、一番丸の就航は、琵琶湖蒸気船時代の黎明を告げるプロローグにすぎない。一番丸によって蒸気船の有用性を痛感した湖国の人々は、明治二年十月には、二番丸を就航させ、その後次々と蒸気船を湖上へ浮かべ、明治十年代には、蒸気船全盛期を迎えることになる。蒸気船の就航には、帆船とは全く別の、新しい、しかも海外の専門的知識を必要とした。そうした技術的困難がありながらも、次々と就航していった背景には、その知識を吸収した人々の努力があったのである。ここでは、一庭、石川の影に隠れ注目されることの少なかつた大津町人の一人、伊東源兵衛の足跡から、蒸気船黎明期の問題を考えてゆくことにしよう。

### ○伊東家について

『大津市志』下巻には、伊東源兵衛（秋近）の父巨規と伊東家の略譜が載録されている。それによると、伊東家は延喜年間蟬丸に付いて逢坂に移り住み、以来三十七代を数えるとき、第三十二代義定の時鍛冶職となり、その後代々鍛冶職を専らとしてきた。七軒町に住み、技巧を伴う鍛冶を家業としていたようだ。

代々源兵衛を名乗っており、秋近の父巨規（一七八二—一八五八）は、鍛冶職の傍ら歌人としても知られた人物だった。天明二年に生まれ、家業の傍ら歌道を研鑽し万葉集の注釈などを行ったほどの人物で、彼に教えを請いに来る文化人も多かつたという。しかし、彼は一鍛冶職人であることに誇りを持ち続けていた。彼の工場には、次のような歌が掲げられていたという。家の業おこたりなせそみやひをの

ふみを読むともうたをよむとも

巨規の家業への真摯な思いが伝わってくる。その上で歌への研鑽も深めていったのである。この巨規を父とし家業を継いだのが秋近である。

### ○伊東秋近と琵琶湖の蒸気船

秋近（一八二七—一九〇七）は、父の鍛冶技術をより高めるため腐心したと伝えられている。また、新たな時代の到来をひかえ蒸気船への思いも持っていた。秋近について『大津市志』に次のように紹介されている。

秋近亦鍛冶の術巧妙にして大に祖父の業を發展し夙に水運の有利なると認め琵琶湖上汽船航運の計画を樹て種々研究せしが会々加賀大聖寺藩より汽

船製造機械据付等の下命あり、秋近大に喜び我名を成す此機にありと將に其事に従はんとせし時、

明治維新の爲め大聖寺藩の用命も消滅せり、されど秋近は一旦決心の事は如何なる困難と戦ふも遂行せざれば止ざるの氣質なりければ知友の勧告をも排し独力以て小規模の汽船を製造し湖上航運を始む、琵琶湖丸外数隻にして実に明治二年なりき

『大津市志』上巻には、「一番丸・二番丸」に関し、加賀大聖寺藩大津汽船局発給の「汽船社組立仕法」を紹介した後に「當時造船航海の術に明かなるもの少く七軒町伊東源兵衛は機関術を堀江八右衛門は航海術を兵庫に学び此等の汽船を組立て運用せり」とある。秋近、四十二歳の時であった。

### ○伊東家に残る資料

こうした秋近の業績をたどる資料が、伊東家にわずかが残されている。その一つとしてまず注目されるのが、兵庫で学んだ時のテキストと覚しき五冊の冊子で、『蒸気機械書』と題する黄表紙の四冊と、大判の『付機関図』一冊である。奥書には「明治二年己巳夏刊行蒸気機械書 海軍学校 印」とある。大聖寺藩からの指示によって彼と堀江八右衛門が兵庫に赴いたかどうかは定かではないが、この兵庫での講習をきっかけとして、二人は二番丸の就航に係わったと考えられる。この書が明治二年夏に出版されていることから考えると、二人が兵庫に赴いたのは明治二年夏から秋で、十月には二番丸を就航させる。

高度の鍛冶技術を習得していた秋近といえど、全く未知の蒸気機関の原理や構造を短時間で理解するのは並大抵のことではなかつたと想像される。石川璋が蒸

気機関の先輩格にあたり、彼の指導を得たとも考えられるが、石川自身いつまで大津に留まっていたかは、定かではない。付言しておく、一番丸を成功させた石川は、しばらくして兵庫に移っている。加賀藩が明治二年八月兵庫に兵庫製鉄所を設けており、宗藩の事業であるため、石川も蒸気機関のスペシャリストとして参加したようである。この兵庫製鉄所は、明治四年工部省製作寮兵庫製作所となり、石川自身は、工部省中属に任じられた。琵琶湖での事蹟ばかりが目される石川だが、我が国の蒸気機関の黎明期を牽引した人物の一人だったことを忘れてはならない。

さて、石川が大津を去ると、蒸気機関をメンテナンズできる人物は、伊東が唯一となる。そして彼が頼るべきは兵庫でのテキスト「蒸気機械書」のみだったのである。当時の蒸気機関は英国製が多く説明書も英語だったと考えられることから英語の必要性を痛感していたのだろう。明治四年刊行の「洋学楷梯」と題する冊子が伊東家に残されている。明治初期、何の予備知識もない状態で英語を独学しようとした伊東の向学心には、驚かざるをえない。また、次々と建造される蒸気船をメンテナンズしてゆくためにも、英語を学ぶ必要があったことも確かだろう。

秋近は、明治七年には、家督を養子の政一に譲っている。政一は、鉄砲鍛冶の里として有名な国友村(長浜市)に生まれ、製砲機械学などを学んでいる。彼が大津に移った時期は定かではないが、義父について蒸気船にも関わってゆく、と同時に油搾機など新たな分野にも進出し家業を栄えさせていった。

### 〇おわりに

このように大津の一鍛冶技術者だった伊東秋近は、時代の流れの中で蒸気機関という新しい技術に取り組み、湖国の蒸気船時代を切り開いていった。彼は、早くから蒸気船への夢を育んでいたというが、そのきっかけとなったと覚しき資料が伊東家に残されている。嘉永六年(一八五三)伊豆下田に来航した黒船を知らせる瓦版である。一庭啓二も黒船来航の瓦版から蒸気船への夢を膨らませたと伝えられているが、伊東も同じ気持ちを抱いたのかもしれない。想像でしかないが、黒船の衝撃が、湖上にいち早く蒸気船を浮かべたとするならば、近代の到来は心ある人々の中で具体的な姿として確実に待ち望まれていたことになる。

伊東はその後江州丸会社経営にも参画してゆくが、やがて撤退したようで、その後は政一とともに油搾機など新しい分野に進んでいったと想像される。そして明治三十七年、七十七歳でその生涯を終えた。

伊東と共に兵庫で航海術を学んだ堀江八右衛門については今のところ定かなが分かっていない。ただ、明治初期大津において蒸気船会社の運営に積極的な役割を果たした堀江八兵衛の一族と考えられる。

伊東家には、明治十二年後半期の江州丸会社が残されている。明治十四年の鉄道連絡船に向けて、各会社の競争が激しくなった時代の具体像を伝える貴重な資料群であり、これについてはいずれ機会をみて報告する。

(和田 光生)

## 「大津の鉄道百科展」閉幕

平成十年八月三日から開催しました「大津の鉄道百科展」は、八月三〇日、好評のうちに幕を閉じました。二五日間という短い会期でしたが、滋賀県内や京阪神を中心に、鉄道ファンや当時は懐かしむ方々、また、夏休み期間中ということもあり、子供たちも数多く来館され、にぎやかな展覧会となりました。期間中の観覧者数は約二、〇〇〇名に及びました。

また会期中には、鉄道模型運転会、電車の車庫の見学会、周辺の鉄道史跡の見学会なども開催し、いずれも数多くの参加者がお越しになりました。特に、電車の車庫の見学会には、一〇〇名の定員を大きく上回る、約二八〇名のお申し込みをいただきました。当日は、京阪電鉄の錦織車庫を見学させていただきました。当日は、方々の説明を受けながら、普段何気なく乗っている鉄道が、安全に運行するための影の努力を垣間見ることができました。また、洗車する電車に特別に乗せていただくなど、貴重な体験もさせていただきました。



れぎはくインフォメーション

1月	12月	11月	10月
<p>17 第162回土曜講座 ライフスタイルの変化と家電製品開発秘話</p> <p>土 13時30分～15時 講師 寺田 實(三洋電機株式会社商品企画部長・画家)</p>	<p>24 第163回土曜講座 市長が語る 大津の戦後史</p> <p>土 13時30分～15時 講師 山田 豊三郎(大津市長)</p>	<p>7 第165回土曜講座 現地見学会「大津の一〇〇年を歩く」</p> <p>土 13時30分～15時 講師 樋爪 修(本館学芸員)</p>	<p>31 第164回土曜講座 「家族の一世」展示解説</p> <p>土 13時30分～15時 講師 樋爪 修(本館学芸員)</p>
<p>30 第170回土曜講座 仏像の魅力語る 中世編</p> <p>土 13時30分～15時 講師 岩田 茂樹(本館学芸員)</p>	<p>12 第161回親子歴史講座 しめなわ作り挑戦!</p> <p>土 10時～11時30分 講師 木津 勝(本館学芸員)</p>	<p>14 第30回親子歴史講座 大津の職人さんめぐり①酒蔵編</p> <p>土 10時～11時30分 見学先 平井酒造</p>	<p>3 特別展開連講座 「映像でつづる大津の20世紀」</p> <p>祝 13時30分～15時 講師 樋爪 修(本館学芸員)</p>
<p>23 第168回土曜講座 仏像の魅力語る 古代編</p> <p>土 13時30分～15時 講師 高梨 純次(滋賀県立近代美術館学芸員)</p>	<p>5 第168回土曜講座 瀬田城主山岡氏とその一族</p> <p>土 13時30分～15時 講師 井上 優(栗東歴史民俗博物館学芸員)</p>	<p>21 第166回土曜講座 近世大津の芸能興行</p> <p>土 13時30分～15時 講師 中森 洋(本館学芸員)</p>	<p>17 第162回土曜講座 ライフスタイルの変化と家電製品開発秘話</p> <p>土 13時30分～15時 講師 寺田 實(三洋電機株式会社商品企画部長・画家)</p>
<p>28 第167回土曜講座 民俗と宗教者の役割―江戸時代の在地神職の活動を通じて</p> <p>土 13時30分～15時 講師 米田 実(水口町歴史民俗資料館学芸員)</p>	<p>12 第161回親子歴史講座 しめなわ作り挑戦!</p> <p>土 10時～11時30分 講師 木津 勝(本館学芸員)</p>	<p>14 第30回親子歴史講座 大津の職人さんめぐり①酒蔵編</p> <p>土 10時～11時30分 見学先 平井酒造</p>	<p>3 特別展開連講座 「映像でつづる大津の20世紀」</p> <p>祝 13時30分～15時 講師 樋爪 修(本館学芸員)</p>

※諸般の事情により、内容が変更される場合があります。  
※いずれの講座もはがきで、お申し込みください。

「図説大津市史」だより

本欄では、「図説大津市史」の編さん作業の中で、市民の皆さんから提供いただいた貴重な史料を紹介していますが、今回は秋葉台の平田直隆さんご所蔵の「大津市新制中学校整備公債」です。

戦後の民主化政策の中で教育制度も大きく変わり、昭和二二年四月一日から六・三・三・四の新学制が発足し、新制中学が開設されました。大津市では、当初五校が開校し、その後の学区再編や学校統合により、二四年一月には皇子山・打出・粟津の三校体制となりましたが、この過程で校舎の確保が大きな問題となりました。皇子山中学校は元大津商業高等学校の、打出中学校は元大津市高等女学校の校舎を利用することができたものの、粟津中学校では新校舎の建設が必要となりました。そのため寄付を広く市民から募りましたが、集まったのは予定額の半分にも満たない三〇〇万円という状況でした。一方、市当局は、寄付を当て込んで工事を進めており、工事代金の支払いを迫られていました。

そこで、苦肉の策として考え出さ

れたのが公債の発行でした。この議案が提出された二三年九月市議会では、市当局の提案に対して議会在が発、間に立った市議会議長が辞表を提出するという事態にまで至りましたが、協議を重ねる中で一〇月二日「大津市新制中学校整備公債条例」が可決されました。

写真は、これを受けて昭和二四年三月一日に発行された「大津市新制中学校整備公債」です。中学校建設のための公債発行は知られていましたが、実物が発見されたのは今回が初めてで、戦後混乱期における学校建設経費の捻出の苦勞がしのげられます。

「図説大津市史」の発刊まで一年を残すところとなりましたが、市史編さん室では引き続き史料調査を進めておりますので、情報をお待ちしております。

